

町の総合計画と 地区別コミュニティ計画の 取組について

福岡県 築上郡上毛町

飯南町では、合併した平成17年度から自治振興組織などを生かしての「地域の総合力」を発揮する仕組みづくりを目指して「飯南町地域コミュニティ活性化事業」を進めています。そこで、同じようなねらいで事業展開している福岡県上毛(こうげ)町を視察し、研修しました。

上毛町は、平成17年10月に2村で合併して発足した町で、福岡県東端で、大分県中津市と県境を接する人口 8,900人の町です。中津市の中心部とは、山国川を挟んだ極めて近い位置にありますが、田園風景が広がり、また町の6割超が山林です。

上毛町では、現在総合計画の策定が進められていますが、その柱は「自分たちの村や集落を残していくためには、自分たちが責任をもってその経営にあたる」「役場に任せっぱなしではなく、頑張る住民やその人たちが暮らす集落が報われること」。そのような時代が来ているという背景から、旧村や集落などのきめ細やかな視点を大切に、身近な生活の舞台を対象とするコミュニティ計画づくりが進められています。



上毛町庁舎風景

そして、その計画づくりに、まちづくりにアイデアを出しあい決定していく「住民ワークショップ」を取り入れています。さらにこの計画は、早稲田大学研究室との協力で進められています。住民ワークショップへの参加募集をしたところ、90人の町民が応募されたとのことですが、このことから町民の「まちづくり」への関心の高さを感じました。現在まで2回のワークショップを実施され、自分たちの地区をグループで歩き、地域の可能性を改めて探し、まとめられている段階です。年度内に、残り2回のワークショップを開催して、4地区別コミュニティ計画の完成を目指して進められています。

事業の基本指針である“活動はあくまでも住民が主人公”「自分たちで考え、自分たちで調べ、自分たちで発見し、自分たちで話し合っつくる」を実践されていて、そのことが「住民自治力」をつけることに繋がるものだと感じました。しかし、コミュニティ計画の必要性については、ワークショップ参加者には理解されつつも、町民間で、あるいは地区間で理解度には温度差があることも感じました。

今後の課題は、“一過性の本づくりにならないための取り組み”として、①地域リーダーの要請と住民自治の確立。②職員の意識改革と地区担当制の創設。これらを挙げられていた。地区担当制については飯南町が先行しているが、課題としては飯南町も同様であると思います。

「今後は道州制の議論が大きくなるであろう。10年後に、仮に町が無くなっても、その時に集落も無くなることのないよう、自治力をつけなければいけない。そのためにも、このコミュニティ計画事業を完結させなければならない。」の言葉に表れているように、執行部、議会ともに、この事業推進に不退転の決意で取り組まれていることを感じました。

観光資源の発掘、

渓谷に日本一の大吊橋 大分県 玖珠郡 九重町

九重町は、観光資源である(豊かな緑・高原の温泉・地熱)を活かし、滞在型・通年型の観光リゾートづくりのため、3つの柱(大吊橋・スキー場・リゾート施設)を観光の再生・創造とし、総工費約20億円でこの橋が建設されました。長さ390m・高さ173m・橋の標高777mの人道専用吊橋としては日本一で、橋から見る雄滝と雌滝の景観は壮大。

大吊橋は九重町が管理運営し、平成18年10月から本年7月までに約157万人の来客(料金500円)があったそうです。飯南町でも埋もれた観光資源を活かし、観光客誘致に努力すべきだと強く感じました。



委員会視察研修報告

平成19年7月2日～4日にわたり実施

葉っぱいろどりを売って個人で年1,000万円

徳島県 上勝町 「彩」事業とごみ処理事業



「彩」事業で販売している葉っぱ

徳島県は本当に山が深い。平地が極端に少なく、山肌にへばりつくように民家が点在しています。上勝町(かみかつちょう)は85.4%が山林で、標高600メートルほどの地域に、民家とわずかな農地が点在しています。年間降水量は3000ミリに迫り、深くえぐられた谷には、山奥に似つかわしくない広い川があり、驚くほど透明な水の流れを作っていました。

高齢化率は47%以上もありながら、一人当たりの医療費は年間26万円で、徳島県内の最高位の自治体との差は、なんと20万円。この元気はどこで作られているのでしょうか。

「彩」事業はマスメディアに注目され、全国に知れ渡っています。平均年齢68歳の農家が、葉っぱを売って年1000万円以上も稼ぐ人がいます。パソコンを駆使して、市況データや自分たちの売上データを参考に、生産計画や経営戦略を立て、時には京都や大阪の高級料亭で食事をとりながら、自分たちの商品がどのように使われているのか研究したり、このバイタリティーこそが健康の源とのことでした。80歳を超えたおばあちゃんが、一家の稼ぎ頭で家族を支えているのですから、自信がみなぎり生き生きするのもうなずけます。今では、一度はまちを出て行った若者たちが、おばあちゃんと仕事をするために帰ってきたり、自分の出番を求めてIターンする若者が増えていきます。

このまちにはもうひとつ注目されていることがあります。それは「ゼロ・ウェイスト」(無駄をなくす)ということです。ゴミ収集車を使わず、町内に1箇所だけある「ごみステーション」に自分でゴミを持ち込み、35種に分別し、80%をリサイクルします。生ごみは各家庭で堆肥化されて有機肥料として使われます。古着はハンガーに掛けられ、気に入った人が無償で持ち帰ることができます。これによってこの地域の環境は美しく維持され、「彩」の商品イメージをよりよいものにしています。

町内1ヶ所のごみステーション



「ゆず」の販売戦略で年商33億円 高知県 馬路村

この馬路村(うまじむら)は96%が山林、そのうち70%が国有林です。わずかな農地にはゆずが植えられ、唯一の農産物でした。林業が衰退し、残ったのは「ゆず」だけ。だから20年こだわり続け、年商33億円を越す今の地位を築きました。徹底した有機無農薬農法で品質と安全性を高め、消費者に信頼される商品を作り、商品を作るのではなく、田舎そのもの売ることに努めました。

DMや広告は秀逸で、広告代理店は何日も泊り込み、村人と生活をともにし、村人を主人公にして作り上げていきます。テレビCMには地元の小学生や近所のおじさんたちが普通に登場しています。そして、売れた理由、売れなかった理由を明確にして、自分たちのイメージで、自分たちの手で商品を作り出していくことに努め、時間がどんなにかかっても消費者と強い絆を作り上げています。

合併によって全国から村が消えて行くなか、「きっと村が売り物になるときがくる」という言葉が印象に残りました。

どちらも人口2000人足らずの山ばかりの小さな町と村ですが、自分たちの宝物を10年、20年と大切に育て上げ、こだわりを持ち続け、全国ナンバーワンの地位に着きました。

そのサクセスストーリーは聞くものを感動させずにはおきませんでした。大きな元気を頂き、心から感謝しました。



JAのゆず通販オペレーションセンターで



同センター内の広告企画室